

中国におけるプロテスタント宣教師の教育事業

——ヘンリー・W・ルースの教育資金集め^{ファン・ド・レイジング}を中心として——

松 原 真沙子

Educational Enterprises by Protestant Missionaries in China :
The Case of Henry W. Luce's Educational Fund Raising

Masako MATSUBARA

「中国をキリスト教国に」を目標に、多くの宣教師がアメリカから中国に送られたが、初期の目的は明らかに実現困難であった。そこで教育を通してキリスト教精神を広めるべく、多くの学校を設立した。今日の中国の大学には、この宣教師が残した教育事業に基盤を置くものも少なくない。教育事業には莫大な資金が必要となる。この資金はどのようにして集められたのか。教育資金集めで、大いなる働きをしたヘンリー・W・ルースを例として資金集めの実態を検証した。

はじめに

中国での教育事業を継続させるために、宣教師がアメリカ本国に帰国しては行かなかった資金集めの実態を、ヘンリー・W・ルースを例に、彼の宣教師としての働きも含めてみたい。

ヘンリー・W・ルース(Henry Winters Luce, 1868-1941)は、敬虔なプレスビテリアン信者の両親のもとに、ペンシルヴァニア州スクラントンで生まれた。ルース家は、1600年代のイギリスからの移民で、父親はスクラントンの町で食料品の卸問屋を営んでいた。ルースのキリスト教奉仕生活の始まりは、少年時代に、当時アメリカに広まっていたキリスト教青年会(The Young People's Society of Christian Endeavor)に加わったことである。18歳のときには、三つのカウンティーをまとめた会の初代会長になり、三つのカウンティーを回って活動し、ペンシルヴァニアで開かれた大会に参加してスピーチを行った。この年齢からすでに将来のリーダーを想像させる資質がうかがえる。1888年にイエール大学に入学し、著名なアメリカの海外伝道のリーダー、ジョン・R・モット、シャーウッド・エディー、ロバート・E・スピーアらとの親交を得て、ルース自身も伝道界で名を知られるようになっていくが、ルースの目を海外伝道に向けさせた最初の人物は、ロバート・P・ウィルダー(Robert P. Wilder, 1863-1938)⁽¹⁾だった。モットらと立ち上げたばかりの「学生有志運動」(The Student Volunteer Movement, SVM)の支持者や参加者を集めるためにカレッジや教会を回っていたウィルダー

が、スクラントンの町にやってきた。1886年のことである。このときのウィルダールの話はルースの心を強くとらえたが、ルースがアメリカン・ボードから宣教師として中国に派遣されたのはそれから10年後のことになる。⁽²⁾この10年間にアメリカは急速な成長を始めており、世界もアメリカの力を認識し始めていた。アメリカは西部に領土を広げ、海外貿易を増加させたが、それと呼応するように強いアメリカ人意識と自己讃美の感情も高まっていた。また1890年ごろに、フロンティアは消滅していたため、アメリカ人の目は自然に太平洋の向こう側に向き始めていた。それはまた世界伝道に対する熱意が、アメリカ人の生活のあらゆる分野から起こってくる下地がつくられたときでもあった。アメリカの力が大きくなり、全てがうまくいくと感じさせる時代に、イエールの学生として、またユニオン神学校の学生として伝道活動に関わったことと、後にルースが教育事業資金集めにおいて見せた拡大主義、揺ぎなき自己肯定そして楽観主義とは無縁ではないだろう。

1 山東省登州カレッジ

ルースが派遣先として選んだのは、マティーアが30年前に始めた山東省の登州カレッジだった。⁽³⁾孔子の生地である山東省は、聖なる地として、中国では特別な地位にあった。19世紀末にはすでに人口は300万人に達しており、中国のなかでも経済活動が盛んな土地だった。この地では、1896年に、ルースが到着する40年も前から、ネヴィウス(John Livingston Nevius, 1829-1893)、コルベット(Hunter Corbett, 1835-1920)、⁽⁴⁾マティーアが伝道活動を展開していた。

当時の宣教師の生活はどんなものだったのだろうか。ルースと妻のエリザベスが与えられた住居は、造りも内装もアメリカの家と同じだったが、ガスや電気はなく、水道も暖房スチームもなかった。モダンな外見とは裏腹に、虫の侵入と、山東省の酷暑と厳冬をある程度ふせいでくれる程度のものだった。新任宣教師の生活は下記のようにスケジュールされていた。

6:00 A.M.	起床、入浴(温水なし)、着替え
6:30 ~ 7:00	聖書研究
7:00	朝食
7:40 ~ 8:20	聖書研究の続き
8:30 ~ 11:30	中国語学習
12:00	昼食
12:40 ~ 13:20	午睡
13:30 ~ 16:30	中国語学習
16:40 ~ 17:30	散歩

18:00

夕食

夜の時間

読書と中国語自習

生活は単調で、このスケジュールは厳格に守られていた。登州カレッジの他の宣教師と同じようにルースにも中国名がつけられた。ルースの英語音を基に意味のある名、路思義、つまり姓は路で、名は思義と定められた。この新任の若い宣教師がただものではないことが同僚たちにわかるのに時間はかからなかった。⁽⁵⁾ルースの中国語が上達すると、彼は中国人のなかに友人の輪を広げていった。⁽⁶⁾中国の現実を目にしてからは、「学生有志運動」時代に思い描いていた中国に対するロマンティックな感情はなくなったが、中国に幻滅するようなことはなかった。逆に中国人が置かれている過酷な状況、貧困、病気、無知、迷信、官僚の無能、腐敗そして道德心の欠如などが、ルースに中国人に対する深い同情と生涯変わることのなかった愛情を抱かせるようになった。中国人を救うために、できることはなんでもしようと、若い宣教師ルースは、中国に対して使途的使命を確信した。⁽⁷⁾

ルースは、中国の状況を観察した結果、まずすべきことは、若者の教育であると、ルースなりの結論に達していた。⁽⁸⁾1898年の「東山東プレスビテリアン伝道年次大会」(The Annual Meeting of the East Shantung Presbyterian Mission)で、ルースは、「登州カレッジは、その場所と、他のカレッジとの提携について真剣に考えるべきときにきている」とスピーチのなかで彼の考えを主張して、出席していた宣教師たちを驚かせた。このときがルースの宣教師教育者としてのデビューだったといっているだろう。会場の驚きも意に介さず、ルースはスピーチを続けた。「30年余カレッジは、登州の地で素晴らしい教育を行ってきた。・・・カレッジがその規模において、教育の質においてさらに発展することを目指すことこそが、キリスト教の奉仕精神の実現である。そのためには現在の所在地から、省の中心地にカレッジを移転させる必要がある。現在学生たちは、登州まで来るのに大変難儀をしている。いうまでもなく登州カレッジが、山東省の辺境の山岳地帯にあるからである。建物は現在の規模からさらに広げる必要があるが、それをこの登州で実現させることは賢明な選択ではない・・・」会場から聞える反対の声を無視して、ルースはさらに続けた。「スタッフも資金も不足しているプレスビテリアン派が、単独でこのカレッジを運営していこうとするのは、不経済であることは勿論、それはキリスト教の調和の精神に反するものである。アメリカのあるいはイギリスの他の宗派のカレッジも同じように資金不足に悩みながら、単独でカレッジを維持運営していこうとしている。東山東と西山東のプレスビテリアンは、イギリス系バプティストと近い関係にある。そのイギリス系バプティスト派も単独でカレッジを経営している。アングリカンに関しても、アメリカのメソジスト派に関しても同じことがいえる。それぞれが、山東省における教育事業の拡大を単独でやろうとしている。我々が音頭をとって、これらのク

リスチャン・カレッジに、連帯して、山東省にひとつの高等教育機関をつくることを呼びかけるべきではないか。」ルースのような新任の若造が、しかも正面切ってプレスビテリアン派が守ってきたやりかたに挑戦したのは初めてだった。会場は騒然となった。年長の宣教師は、なんとかその場を収めようとし、中堅宣教師は、ルースの提案を馬鹿げているとして却下してしまった。彼らには、30年もの間、登州カレッジは現在のやり方で十分に学生を集め、中国に貢献してきたのだという自負があった。他宗派との連帯に到っては、信経においても、方針においてもあまりにもちがいがり過ぎて到底可能とは思われなかった。また仮に連帯するとなれば、莫大な資金が必要になる。そんなものはどこにも見当たらなかった。数人の若手宣教師がルースに賛成してくれたことを除けば、会議出席者は反対で結束していた。ルースは、中国人学生にキリスト教精神を教えたいと意気込んで中国にやってきたが、物理学の担当にされた。イエールの学生だったときに物理の基礎を学んだことがあるだけだったばかりでなく、それを中国語で教えなければならなかったことから、専門用語を覚えるだけでも大変なことで、最初の年は、学生よりもほんの数歩前にいるだけの頼りない教師だった。しかし一年後には物理学の学科目主任になっていた。また長衫を着て、ほとんど身体を動かすことをしない学生に、身体を動かすことの楽しさを体験させようとバスケット・ボールを学生の人気スポーツにしたのもルースだった⁽⁹⁾。

1898年の「東山東プレスビテリアン大会」でのカレッジの連帯というルースの提案は、葬り去られたわけではなく、翌年の「西山東プレスビテリアン大会」では、早い時期に、山東省の省都にクリスチャン・カレッジを創立することが決議された。そのためには登州カレッジを省都済南に移転させることで実現が可能であることも話し合われた。義和団事件による中断が、逆に宣教師たちにこの課題をじっくり考える時間を与えたともいえよう。韓国に避難していた宣教師たちは、山東省に戻るとただちに計画の再考とその実行に動き始めた。東山東と西山東の伝道団の合同会議が芝罘で開かれ、登州カレッジの移転問題が協議された。投票の結果移転先は、濰縣に決定した。移転のための実行委員会が組織され、ルースは委員長に指名された。委員長としてさっそく移転の具体案を作って、本国の海外伝道協会(The Board of Foreign Missions)に報告しなければならなかったが、ルースはこの案には失望していた。登州カレッジは、省都の済南に移転させるべきで、いずれ起こってくる需要を考えると、とりあえず濰縣に移転という案は、ルースには姑息に思われた。彼の描いていた将来像はもっと大掛かりなものだったが、委員長としてただちに取り掛からねばならない課題が山積していた。計画を支援してくれる個人や団体を、中国とアメリカの両方に確保しなければならなかった。土地を購入し、建物を建てるために資金を確保する必要があった。カリキュラムを見直し、スタッフを採用する仕事もあった。ルースは、カレッジ改革の連帯の相手として、早くからイギリス・メソジスト派を考えていた。1898年には、齒牙にもかけられなかった連帯

が考慮されるようになった背景には、中国政府が中国全土に学校をつくり、これを政府の管轄下に置く教育改革を進めていたこと、またアジアでいち早く近代化をなしとげた日本が、地理的に近いこともあって留学先として人気を得ており、何千人という中国青年が日本に渡ったということがあった。各地の宣教師は、この時代の流れの変化を身をもって感じており、高等教育事業を拡大充実することは、火急の課題であると認識し始めていた。当然のことながら、山東省でも、かつてルースの主張に反対した宣教師にも変化が現れ、連帯による高等教育の拡大と充実は自明の⁽¹⁰⁾ことになった。

1902年6月13日、鎮州府で開かれたバプティストの会議に、ルースは登州カレッジを代表して、学長のバーゲン(Paul D. Bergen)とともに出席した。この会議で「イギリス・バプティストとアメリカ・プレスビテリアン伝道団の連合基本方針」(Basis of Union between English Baptist and American Presbyterian Missions)が採択され、三つのカレッジが事実上ひとつになることの合意をみた。この基本方針には以下の9項目が盛り込まれている。⁽¹¹⁾

I 維縣の教養カレッジ、鎮州府の神学カレッジ、医学カレッジの三つのカレッジをひとつのカレッジに統合する。医学カレッジの場所と運営に関しては今後の決定を待つ。

II 目標と方針

1 教養カレッジの目標と方針は、クリスチャン・ファミリーの青年に、キリスト教精神に基づいた教養教育をすることにある。

2 (a) 神学カレッジの目標と方針は、牧師および伝道師に神学を学ばせることにある。

(b) 神学を学びたいものには準備コースを設ける。

(c) バプティストもプレスビテリアンもそれぞれに、平信徒の説教師と村の校長を教育するためのコースを続ける権利をもつものとする。

III 運営

カレッジは、二つの宗派によって選ばれた一つの理事会の下に運営され、最高決定機関たる本国の協会の下に置かれる。

IV 理事会の構成メンバー

理事はバプティスト派から3名、プレスビテリアン派から3名の6名から成り、任期は3年とする。両派とも毎年1名が、新しいメンバーと入れ替わる。(最初の選挙では、両派とも、任期1年の理事を1名、任期2年を1名、任期3年を1名それぞれ選出することになる。)ファカルティーのメンバーは、理事会に専門家としての意見を述べる目的で出席が認められる。しかし投票権はもたない。

V 理事会の任務

- 1 理事会は少なくとも年に1回の会合をもち、事務処理を行い（費用は理事会もち）、会合の報告を両派の伝道団に提出する。
 - 2 理事会は、学長、副学長も含めて、教員の採用に際して推薦を行う。このような推薦は、両派の承認を必要とする。
 - 3 理事会は、ファカルティーが提出した各コースの履修科目を検討し、決定する。この過程については全て両派の伝道団に報告される。
- VI ファカルティー
- 1 各カレッジの教員は、できるかぎり両派から平等に採用する。
 - 2 教養カレッジには、少なくとも4名の男性教員をおく。
 - 3 神学カレッジには、少なくとも2名の男性教員をおく。
- VII カレッジの資産の所有権
- 瀋縣のカレッジの建物および設備は、プレスビテリアン派の伝道団の所有とし、鎮州府のカレッジの建物および設備は、メソジスト派伝道団の所有とする。修繕や改築にかかる費用は所有者の負担とする。
- VIII 財政
- 1 プレスビテリアン派の所有になる瀋縣にあるカレッジのバプティスト派のスタッフは、プレスビテリアン派によって提供された住居の家賃を払う。メソジスト派の所有になる鎮州府にあるカレッジのプレスビテリアン派のスタッフは、バプティスト派によって提供された住居の家賃を払う。
 - 2 当座の出費は、それぞれのカレッジが、それぞれが集めた学生数に按分して負担する。
 - 3 自立自給が最も望ましく、理事会はできるかぎりその方向を奨励する。
- IX 宗派に関する教育
- 教会運営と洗礼に関する教育は、それぞれの宗派が別々に行うものとする。

確立された二つの宗派が、しかも国を異にしなが、共同でひとつのカレッジを立ち上げていくことは中国におけるキリスト教伝道の歴史上でも初めてのことである。しかしこのプロジェクトを成功させるには、まず資金が必要だった。登州カレッジの学長バーゲンは、1902年に休暇でアメリカに帰国した際に、かなりの資金を集めて中国にもどってきた。1903年にはその資金を基礎に、瀋縣のカレッジの建設が急速に進んだ。鎮州府の、グロッチ・ロビンソン訓練学校と称していたイギリス・バプティスト派の神学校は、ユニオン神学カレッジと名称変更され、カレッジの統合もかたちを整えつつあった。⁽¹²⁾

1905年の秋、ルースはバーゲン学長から、翌年にひかえた休暇帰国の際に、アメリカ本国

での資金集めを組織的にしてほしいとの要望を受けた。ルースは、着任以来力を注いできた物理学のコースをさらに充実させる仕事の途中であることが心残りではあったが、バーゲン学長の要望を引き受けたときに、ルースの宣教師としての方向が教育者のそれから経営者のそれへと変わったとあってよいだろう。⁽¹³⁾資金集めは宣教師が経験する任務のうちで最も苛酷なものといってもよい。どこにあるのかもわからないような土地にあるカレッジのために、見知らぬ人に財布を開かせることは、想像するよりもはるかに難しいことだった。⁽¹⁴⁾

2 教育資金集めのはじまり

ルースは家族を連れて、1906年初めに10年ぶりにアメリカに帰国した。帰国すると直ちにカレッジのための資金集めの計画を立てた。ルースはニューヨークの伝道協会事務局と相談の上、3つの目標を立てた。(1)カレッジを完成させるために必要な残りの資金を調達する、(2)いつも手元に置いておける確実な予備資金として、250,000ドルを調達する、(3)財政援助をしてくれるスポンサーの団体をアメリカで組織する。アメリカ人にとっては、伝道のために献金をすることは目新しいことではなかった。しかし「中国」にある大学のために献金したことはなかった。ニューヨークの伝道協会もこの前代未聞の献金に対してなんらの建設的な計画ももち合わせておらず、教会の有力メンバーに話してみるくらいの援助しかできなかった。ルースは、自分の才覚でこのプロジェクトを成功させるための資金調達方法を考え出さなければならなかった。最初にルースが接触したのは、故郷スクラントンの友人たちだった。次には「学生有志運動」時代に知己を得た人々、そしてイエール時代の知人にも接触した。この過程で、アメリカ人が中国に対していかに無知であるかを思い知らされた。アメリカとヨーロッパの数カ国を除いた他の国々は、野蛮で無知な人々の住むところと信じて疑わないアメリカ人が少なくないことにルースは驚いた。ルースは自分の任務として、単に資金を調達するだけでなく、アメリカ人を啓蒙する任務の必要を感じていた。ルースは教会の集まり、その他さまざまな集まり、あるいは個人に対して中国について話すことを続けた。それは、19世紀の初期に、プロテスタントの宣教師が中国人にキリスト教の神の国に就いて忍耐強く説き聞かせたのに似ていた。ルースは、中国からアメリカに派遣された宣教師のように感じた。ルースの任務を理解したか否かは別にして、気前よく寄付してくれる人々もいたが、十分に豊かであるにもかかわらず冷たく無視する人々も少なくなかった。ルースはしばしば失望させられたが、挫折することはなかった。資金はルースの計画の十分の一しか集められなかった。しかしルースおよびルース家にとっての最大の収穫は、富豪のマコーミック夫人の知己を得たことと、アジアのクリスチャン・カレッジを支援するためのスポンサー・グループの最初の基礎をつくったことである。マコーミック夫人はその死までの16年間、ルース家の子どもたちの教育の援助をしてくれ、スポンサー・グループの数は予想したより

も多くなっていった。⁽¹⁵⁾

3 山東キリスト教大学の設立と二度目の教育資金集めのためのアメリカ旅行

ルースが帰国したときに濰縣のカレッジでは、新たな問題が起こっていた。この問題は後々も尾を引くことになるのだが、カレッジは、伝道者を育てることのみを目的とするべきだとするグループと、山東省が必要としている教育者を育てることに奉仕するべきだとするグループの間に意見の折り合いがついていなかった。また一方キリスト教徒のみの入学を許可するべきだとする意見に対して、非キリスト教徒も含めてもっと広くカレッジの門戸を開放するべきだとする意見の対立もあった。しかしともかく三つの（医学カレッジは済南に開設されることになった）カレッジがひとつになり、山東キリスト教大学(Shantung Christian University)として発足した。山東省の地がその昔、齊の国、魯の国だったことから中国語では齊魯大学(Cheeloo Daxue)と呼ばれた。⁽¹⁶⁾

清朝が崩壊し、新しい時代が始まると、登州カレッジの学生や中国人教師のなかにも新しい動きが出始めた。民主主義、自主性、率直さの徳を伝えてきた西洋人教師に対して、学生や中国人同僚が教えられたことを実行し始めた。1912年卒業のクラスが、学長に対して、礼儀を守りながらも決然とカリキュラムと教授法の改善を申し出たのである。教師は教えることに専念し、伝道活動をしないうこと、授業では教科書を使うこと（講義をするのみの授業はやめる）、英語の授業をもっと増やすこと、授業の進め方は、もっと効率よく最新の教授法で進めることが申し入れの内容だった。突然の学生の大胆な行動に教師は驚愕したが、ファカルティーとしては、学生のいい分、批判を認めないわけにはいかなかった。中国政府系の学校の水準が急速に向上していることを目の当たりにして、ミッション・スクールも、これまでのやり方で良しとしているわけにはいかず、早急に改善する必要がある。カレッジの改革となると、現状の登州、鎮州府、済南の三ヶ所にキャンパスが分かれていることは非常に不便だった。これはルースが10年も前に予測したことであったが、省都にキャンパスを集めるべきであるとの意見がファカルティーのなかから出てきた。喜ぶべきことであったが、問題は資金だった。土地を購入し、建物を建て、必要な人材を雇い入れるには先立つものが必要だった。誰がこの責任を負うのかとなるとルースをおいて他に適任者はなかった。登州カレッジのバーゲン学長は自身の辞任にあたって、ルースを、三つのカレッジを統合した山東キリスト教大学の学長にと望んだが、ルースの先を見越して、新しいプロジェクトを実行していくリーダーシップとその強烈な個性とに恐れをなすものもいて、結局は学長には選ばれなかった。そのこともあって、ルースは再びアメリカで資金集めをする任務を引き受けた。⁽¹⁷⁾

2度目の資金集めでは、ルースは、できるだけ多くの土地を訪れる心積もりで、各地のしかるべき人物への紹介状を手に入れておいた。紹介状といってもピンからキリまでで、門前

払いをされない程度のものから、ルースという人物に興味をもたせるものまでさまざまだった。ルースは経験から、寄付をしてくれそうな人物に会ったら、その瞬間に相手の心を掴まなければ目的は達せられないことを心得ていた。ルースは、愛想がよく、外向的な性格であったこと、また明るい色の髪をした美男子だったことも手伝って、人が集まる場所で必ず人気者になれたことは想像に難くない。とはいえ1913年末には、予定の三分の一の100,000ドルしか集まっていなかった。悪いスタートではなかったが、予定の全額を集めるにはさらにもう一年アメリカに残らなければならなかった。⁽¹⁸⁾

ルースは家族から離れて、資金集めのためにアメリカを旅している間、息子のヘンリー・ロビンソン・ルースに行く先々から手紙を書き送っている。離れている息子の教育という父としての思いを込めて、また自分が伝道のためにどんな人々と会い、どのような働きをしているかを細々と書き綴っている。その手紙から資金集めの旅がどのようなものであったか、頻繁に移動するルースの旅がいかに大変なものであったかが見えてくる。恐らくは、当時のセールスマンの旅に似たものであったと想像される。以下に何通かの手紙を引用してみたい。⁽¹⁹⁾

1906年3月6日* ルイスヴィレ、ケンタッキー

愛する息子へ

今後私から手紙を受け取ったら、レターヘッドを見て、私がどこから書いているのか記録しておいてほしい。そして地図でその場所を確認してほしい。.....私が今晚お世話になるマクネール家には三人の子どもがいます。ヘレンは6歳、その下の男の子は5歳、そしてその下が3歳です。ヘレンは船と帽子を製作し、そこに君の名前を書いて、君に送ってほしいといってきました。

父の仕事がうまくいくように祈っててください。.....

* (第1回目の資金集めの旅の際に、当時8歳だった息子に送られた手紙である)

1914年9月29日 クリーヴランド、オハイオ

親愛なるハリーへ

君に定期的に手紙を書くことに決めているが、先週の土曜日は、移動と仕事とのため、それを守ることができませんでした。

チューターの仕事をするを申し出たとのことですが、私は納得できません。君のスケジュールはすでに一杯のはずです。そのうえチューターを引き受けて、よい成績、恐らくはクラスで一番の成績を保つことができますか？君はやりすぎているようです。やりすぎて全てが上っ面だけになるのがアメリカのカレッジの学生の悪いところです。

(良い成績をとって)奨学金を獲得するために、今年はチューターをやめること、それが

君のためです。

1914年10月18日 セント・ポール、ミネソタ

親愛なるハリーへ

今日は当地での新しい礼拝堂の献堂式のためにミネアポリスから駆けつけました。この教会は、社会的にも、また財政的にも大きな力をもっています……

今日の午後にはYMCAでスピーチをする予定です。明日の午後には昼食会をします。何名がこの招待を受けてくれたかまだわかりません。また期待している人物が来てくれるかどうかともわかりません。

1914年10月29日（移動中の列車のなかで）

親愛なるハリーへ

ミネアポリスからアイオワのウォータールーへと移動中です。そこで人であって、それからセダー・ラピッズに移動します。セダー・ラピッズにはアイオワで最も有力なプレスビテリアンのカレッジがあります。……

今から10ヶ月以内に4,000ドル集まるはずですが、4,000ドルのなかには、たまたま数ドルを出そうと思った人からの寄付があれば、あらかじめ500ドルから1,000ドルを用意してくれていた人からの寄付もあります。ロイス夫人は500回の講演会をして、カレッジの建物のために15,000ドルを集めてくれました。メタハウサー家から6,000ドルの寄付がもらえそうです。今後この地区から5年ないし6年の間に合計で50,000ドルは集まりそうです。

1914年11月4日 シカゴ、イリノイ

親愛なるハリーへ

3日間だけの予定ですが再びシカゴに来ています。ミシシッピ河の河畔の町のロック・アイランドです。昨夜はデイヴィス夫妻と過ごしました。デイヴィス夫人は、セント・ポールのフレッド・ヴェヤハウザー氏のお姉さんです。彼らのお父さんが亡くなったときに6,000ドルを残されました。私は、自然の成り行きで、それをカレッジの建物のために寄付してくれないかと頼みました。他の姉妹が同意すれば寄付してもいいとのことでした。ヴァッサーのヒル教授夫妻に会う予定です。ヒル夫人は姉妹のうちのひとりです。前回ホッチキス^{*}への途上で彼らと連絡をとっておいたことを覚えていると思います。……

（*息子のハリーは、イエール大学入学前、ホッチキス・プレップ・スクールで学んだ。）

1914年11月17日（シカゴからペンシルヴァニアのワイラシングへ向かう列車のなかで）

親愛なるハリーへ

ニュー・ヘイヴンに行くようですが、愛をこめてアドバイスをしておきます。

- 1 セーターと手袋など十分な防寒の用意をして行くこと。寒くなるかどうかはわかりませんが、私は、ゲーム^{*}中に大変寒い思いをしたことがあります。
- 2 ロリポップ（砂糖菓子）のごときものを食べ過ぎないこと。お腹の調子を悪くします。

こういうことをいうのは、君がホッチキスに戻ったときに最善のコンディションでなければ、この旅行の意味がないからです。.....

このゲームに行けることは君にとって大変いいことです。またイエール大学を見ておくこともできます。.....

（*アメリカン・フットボールの試合を見にニュー・ヘイヴンに行き、その記事をホッチキスの校内紙に書くことになっていたものと思われる。）

1914年12月27日 （ピッツバーグに向かう列車のなかで）

親愛なるハリーへ

もし噴霧器を持ってくるのを忘れたなら、セイラーの錠剤入りをひとつ買いなさい。このカタルを治すには、鼻の通りを良くすることです。決して強く鼻をかまないように。鼻を強くかむと、口から耳に通じる欧氏管に風邪の菌を送り込んでしまいます。.....身体を動かすこと、そして新鮮な空気を吸うことです。わたしが特に注意してほしいと思うのは、お母さんの方に聴力障碍の傾向があるからです。聞えないことは大変なハンディキャップです。.....君に必要なのは、強い身体と、強い精神です。三つのことには特に気をつけてください。1 お腹の調子、2 話す、3 聞く.....

知らない人たちに会うのは疲れます。これが毎日の私の仕事です。しかしこれによって祝福を受け、新しい友人も得ています。.....大勢の人々と知り合って、知りすぎるということはありませんし、多くの友だちを得て、得すぎることはありません。

ルースが中国に戻ったのは、1915年の夏だった。アメリカでの苦しかった資金集めから解放されたルースを待っていたのは、さらなる苦難だった。5月には、教養カレッジの学生が反乱を起こし、学期末を1週間前にして、春学期を終了せざるをえなかった。秋の新学期には入学希望者が減少してしまった。学生の反乱の直接の原因はカリキュラムに関するものだったが、不穏な国内情勢と国際情勢のもと、学生も将来に不安を感じていたのだろう。このように重要な時期にありながら、新しい大学の学長は決まっておらず、大学の基本方針も確立されていない有り様だった。⁽²⁰⁾しかしそんななか、済南の医学カレッジが第一回卒業生4名を

送り出した。1910年3月、2年間の科学教育を修了した学生9名が医学カレッジに入学したが、2名は中途退学、2名は卒業試験が不合格、1名は病気のため休学と、入学時よりも5名減っていたが、1915年1月、済南府ユニオン教会の中国人牧師による「よきサマリア人たれ」という祈りに送られて、4名が山東キリスト教大学医学カレッジ第一回卒業生として社会に出て行った。ルースが帰ったのは15年の夏だったので、この卒業式に立ち会うことはできなかつた。⁽²¹⁾

4 教師から教育事業家へ

1915年末になって大学評議会がバプティスト派のブルース (Percy Bruce) を学長に、プレスビテリアン派のルースを副学長に選出した。同時に評議会はルースを、ニューキャンパス建設委員会の委員長に選出した。ルースが一年余留守にしていた間、建設計画がほとんど進んでいなかったことにルースは大変落胆した。契約した建築家の仕事振りは、設計段階でも、建設現場の監督業務においても大幅に遅れたままだった。また第一次大戦の影響で建築資材は高騰していた。解決できることには早急に手をつけ、いらぬ摩擦は避け、待てることは我慢して待つという方針で、ルースは、一切を受け入れた。1916年にルースは家族とともに濰縣から済南に引っ越した。登州カレッジに赴任した最初の年に出した、山東省の省都済南にキリスト教の大学をつくろうというルースの提案が、忍耐強い努力の結果、実を結ぼうとしていた。にもかかわらず、ルースはアメリカから帰って以来、単なる一時の改革に伴う問題以上の、根本的な問題があることを感じて頭を悩ませていた。国がちがい、また異なる組織に属していた人々をひとつにしようとするところに非常な無理があった。また山東省のキリスト教がひとつにまとまろうという方向は、まだほんの実験段階でしかなかった。アメリカ人とイギリス人の間には、歴史上兄弟だったというには、すでにその考え方に大きなちがいができていた。アメリカ人は、イギリス人が優越意識をもちたがる鼻持ちならない人々と感じ、イギリス人は、アメリカ人は独り善がり、出しゃばりで、礼儀知らずと感じていた。しかしながら、国籍によるちがいや、個人的な行き違いは、マナーと友好の精神をもって、互いに直接的な衝突を避ける努力はしていた。山東キリスト教大学が、ひとつの大学として成功するには、物理的な集合状態を経て、内部の化学的変化への過程を経なければならなかった。ルースは、副学長とニューキャンパス建設委員会委員長を兼任するということは、ルース自身が正にこの過程を身をもって実践しなければならないということだった。しかしルースは長く組織から離れすぎていたためもあるだろうか、物事が、民主的な手続きを経ることなく、内輪で独裁的に決定されていく閉鎖的体質を感じていた。強い信念から、時には強引に物事を押し進める彼自身の性格が摩擦の原因となり、悪意に取られる危険があることも自覚していた。ニューキャンパス建設委員長のルースが知らないところで決定が下され、実行されてい

くことがルースの立場を非常に困難なものにした。外部の者の目にも、山東キリスト教大学におけるルースの困難な立場が見えたのか、1916年末、杭州キリスト教カレッジから学長にとの誘いもあった。ルースの気持ちが全く動かなかったということではないが、キャンパスの建物を完成させていない時点で済南を去ることは、ルースには無責任に感じられた。1917年春にやっと主な建物の完成をみることができた。しかしそのころには、ルースと大学中枢の権力との不協和音は、修復不能なところまできていた。ついにルースは、ほんとうに必要とされているところに自分を捧げるほうが賢明だと思えるようになった。幸い「中国キリスト教教育協会」(China Christian Educational Association, 以後CCEAと略)から誘いがあった。1917年夏、登州の地に足を踏み入れてから丁度20年後の1917年夏、ルースは山東省に別れを告げ、家族とともに上海へと向かった。⁽²²⁾

CCEAは、1913年からゲイムウェル博士(Frank D. Gamewell, 1857-1950)⁽²³⁾が事務局長の地位にあり、ルースは、事務局長補佐として博士の片腕となった。CCEAの主たる任務は、中国全土に散らばる学校間の協力を推進することと、また協力がしやすいように、学校のシステムを統一することだった。組織としては、高等教育部、初等・中等教育部、宗教教育部、生涯教育・社会人教育部の四部門を置き、それぞれの部に評議会と事務局を置いた。高等教育部の評議会は、カレッジからの代表者が委員をつとめ、初等・中等教育部の評議会は、学校長の代表が委員をつとめた。また上記の四部門は、ひとつになって、キリスト教教育全国評議会(National Board of Christian Education)を組織した。このように決められた役割からみると、CCEAは、中国で教育事業に携っている宣教師に、指標となるものを提示していく責任を負う組織だったと考えていいだろう。⁽²⁴⁾

CCEAで、ルースに最初に与えられた任務は、宗教教育部門の充実と、初等高学年および中等教育の実態調査だった。この任務を遂行するには、中国全土を巡回する必要があったが、ルースは、キリスト教伝道のなかの教育事業がどのように行われているかを直接自分の目で見、また教師や生徒に会うまたとない機会を与えられたと、この物理的に困難な任務に前向きに取り組んだ。下は幼稚園から上はカレッジまで、中国には数千のキリスト教の教育組織が宣教師によって運営されていることを、ルースはここで初めて知った。⁽²⁵⁾また山東省は、聖地とはいえ、中国の周辺部に過ぎなかったが、上海は新中国の中枢の動きと、とくに国際社会の動きが手にとるようにわかる場所であったことも、CCEAでの経験と相まって、後々のルースの活躍に大いにプラスになったものと考えられる。スチュアート⁽²⁶⁾に突然呼ばれて、杭州キリスト教カレッジの学長に就任するよう要請されるまでルースはCCEAで働いた。スチュアート自身は、北京に創立計画中の燕京大学に学長に就任することが決まっていた。⁽²⁷⁾

むすびにかえて

1900年から1925年は、アメリカの中国におけるキリスト教伝道の黄金期と位置づけられている。⁽²⁸⁾アメリカの繁栄をバックに、伝道事業用の資金も多く集まって、数多くの青年男女を宣教師として中国に送り出すことができた。中国のナショナリズムとの衝突も、皆無ではないとはいえ、アメリカは、中国人の排外主義の直接的憎悪を比較的免れ得る立場にいた。またミッション・スクールに学び、英語を話すことはある種のステータスにもなっていた。ルースは二重の意味で大変に幸運な宣教師だったといえよう。第一点は、伝道の黄金期に活躍できたことである。第二点は、ルースはなんといっても、イエール大学を卒業し、ニューヨークのユニオン神学校に学んだ宣教師のなかのエリートだったことである。ルースが並みの能力の人間ではなかったことはまちがいないが、長老的宣教師の、教条主義的神学を陳腐と感じると、そこに水を差さずにはいられないタイプの人間でもあった。また熱烈な愛国主義者で、アメリカは神から特別に祝福された国で、そうであるがゆえにキリスト教と、アメリカの価値であるデモクラシーを他の国々に広めることを托されていると堅く信じてもいた。⁽²⁹⁾常に商売を大きくすることを考えている商人のようなところもあって、小規模なミッション・カレッジが目に入ると、それを総合大学に発展させることを考えた。彼が資金調達の問題から解放されたことはなく、30年の宣教師生活のうち、11年をアメリカ本国における資金調達に費やしている。山東キリスト教大学開設のために資金を集め、後には燕京大学のために200万ドルという驚くべき金額を集めた。資金調達でルースの右に出るものはいないであろう。⁽³⁰⁾ルースの宣教師としてのあり方を、俗物的として片付けてしまうこともできよう。しかし事はそれほど簡単ではない。医学や自然科学系の学部をつくろうとすると、当然ながら莫大な資金が必要となる。その資金を誰がどのように手当てするか。それが解決できなければ、よき志から出た計画も机上の楼阁に過ぎなくなる。中国のミッション・スクールには大なり小なり、ルースのような役割をする宣教師がいて、本国のキリスト教徒個人、あるいは組織からのよき志の証として差し出された献金を集め、こうした彼らの働きによって支出のほとんどをまかなっていたことは否定できない。中国が共産党の支配するところとなったとき、宣教師たちは、本国のキリスト教徒の気前のよい支援を受けて、自らの手でキリスト教信仰と教育を授けた中国人の命運を案じた。ルースの息子のヘンリー・ロビンソン・ルースが、自ら主宰する *TIME* 誌を使って「中国人知識人難民救済運動」(Aid Refugee Chinese Intellectuals)⁽³¹⁾を組織し、中国知識人に救済の手を差し伸べようとしたことは自然の成り行きだったといえよう。この点についての検証は、今後の課題としたい。

-
- (1) Garside, B. A. *One Increasing Purpose: The Life of Henry Winters Luce* (New York: Fleming H. Revell Company, 1948)pp.21-35.
Biographical Dictionary of Christian Missions, edited by Anderson, Gehard H, (New York: Macmillan, 1998)p.414.
 - (2) Garside, *ibid.*, p.26.
 - (3) *ibid.*, p.60.
 - (4) Anderson, *op.cit.*, p.490 & p.152. ネヴィウスは、山東省で多くの自給・自立教会をつくることを伝道の最大目標に掲げて活動した。これらの教会は、ネヴィウスという強烈な個性と情熱によって成り立っていたため、ネヴィウス亡き後は、中国では自然消滅したが、韓国にはネヴィウスの理想が根付いた教会もある。コルベットは、煙台を本拠地にして、山東省にプレスビテリアン派の伝道基盤を築いた。山東省をくまなく回る巡回伝道をする一方、教会内に博物館を作って、中国人に公開することにも力を注いだ。1900年には72,000人を前に説教したことでも知られる。
 - (5) Garside, *op.cit.*, pp.81-85.
 - (6) *ibid.*, p.89.
 - (7) *ibid.*, pp.91-92.
 - (8) *ibid.*, p.93.
 - (9) *ibid.*, pp.103-105.
 - (10) *ibid.*, pp.106-108.
 - (11) *Chinese Recorder (CR)* 33 (August 1902), Proposed United Colleges in Shantung. Basis of Union between English Baptist and American Presbyterian Missions, pp.417-418.
 - (12) *ibid.*, pp.109-111.
 - (13) *ibid.*, pp.113-114.
 - (14) Garside Collection, Box 2, Folder: Appraisal of Henry Luce's Character, Hoover Institute Archives, Stanford University.
 - (15) Garside, *op.cit.*, pp.113-124. & p.133. 濰縣にルース家が新築した住居の費用は全てマコーミック夫人が負担した。
Swanberg, W. A. *Luce and His Empire* (New York: Charles Scribner's Sons, 1972)
p.26, 44 & 47. ルースの長男ヘンリー・ロビンソン・ルース（後の *Time*, *Life*, *Fortune* 誌の創始者）はイエール大学卒業時に1,000ドルのプレゼントをマコーミック夫人から受け、1年間オックスフォード大学で学ぶことができた。
 - (16) Garside, *op.cit.*, pp.126-127.
 - (17) *ibid.*, pp.142-143.
 - (18) *ibid.*, pp.149-151.
 - (19) Garside Collection, Box Q, Folder: Luce Family Relationship.
 - (20) Garside, *op.cit.*, pp.153-154.
 - (21) *CR*, 46 (January, 1915), pp.196-197.
 - (22) Garside, *op.cit.*, pp.152-161
 - (23) Anderson, *op.cit.*, pp.234-235. サウス・カロライナ生まれのメソジスト派宣教師。義和団事件の際、56日間の北京籠城の間“参謀長”として、3,500人の人々の命を守り抜いたことで、ゲイムウェル博士の名を一躍有名にした。コーネル大学で工学を学び、化学と物理学の教師

として中国に来たが、創立準備中の燕京大学の学長代理を務める一方で、CCEAの事務局長を12年間務めた。シラキュース大学とコロンビア大学から名誉博士号を授与された。

- (24) *Christian Education in China : A Study Made by an Educational Commission Representing the Mission Boards and Societies Conducting Work in China* (New York: Committee of Reference and Counsel of the Foreign Missions Conference of North America, 1922), p.59.
- (25) Garside, op.cit., p.168.
- (26) Anderson, op.cit., pp.648-649. スチュアートは、プレスビテリアン派宣教師の両親のもとに杭州に生まれる。1908年から1919年まで南京神学校でギリシャ語を教える。後に、北京大学、華北ユニオン神学校、華北女子ユニオン神学校が合併してできた燕京大学の学長となる。1946年から1952年まではマーシャル将軍に請われて駐中国アメリカ大使を務める。
- (27) Garside, op.cit., p.173.
- (28) Uhalley Stephen, Jr. and Xiaoxin Wu. *China and Christianity: Burdened Past, and Hopeful Future* (New York: M. E. Sharpe, 2001), p.187.
- (29) Swanberg, W. A. *Luce and his empire*, (New York: Scribner, 1972), pp.19-20.
- (30) Mackinnon, Stephen R. and Oris Friesenn. *China Reporting: An Oral History of American Journalism in the 1930s & 1940s*. (Berkeley: University of California Press, 1987), p.10.
- (31) Garside File, Box No.12, Folder: Henry Luce, Hoover Institute Archives, Stanford University.